

『夜は更け、日は近づいた』 ローマ13章11節-14節

1、「夜は更け、日は近づいた」いい言葉です。しかし、言葉の響きの重さが自ずと「夜は更け」にかかっている自分に気が付き愕然とします。今日12月14日。「総選挙」の結果はもうほとんど“権力”によって方向づけられていて、メディアが伝えるように「“日本国憲法” 明文改憲路線」(米国に追従して戦争が可能な国への明確化)が圧倒的勝利をするだろう、という状況がのしかかっているからです。「戦後民主主義」の「葬儀」に臨席しているような気持ちです。でも、この聖書の箇所は、「日は近づいている」の響きのゆえに、アドヴェント(待降節)の教会暦テキストに選ばれているのです。「あなたがたが眠りより覚めるべき時がすでにきている」(11)という覚醒を、ローマの教会の信徒たちに促す、著者パウロのこの書簡の最も大事な部分です。

2、「ローマの信徒たち」はローマ帝国の支配秩序・価値観から自由な主体として、ナザレのイエスの福音を信じ「信仰に入った」(11)のです。しかし、しばらくすると、元の価値観に生活ぐるみ絡めとられました。そのローマ社会の現実を著者は3つの次元で描写します。①「酒宴と酩酊」(酒の神バッカスへの祝宴。現実逃避と自己陶醉)。②「淫乱と好色」(社会秩序保持のための「神殿娼婦」、現代の「性産業」、日本軍隊の「従軍慰安婦」問題の類い)。③「争いとねたみ」(権力構造の裏側、競争や格差の社会、弱者切り捨て)。パウロはここからの脱出を「人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです」(3:23-24)と解き明かしてきました。ヨハネ文書の表現では「神の愛」(3:16)ということです。この初心に帰ることが「眠りから覚める」(11)ことでありました。

3、「覚める」を12節は「闇の行いを脱ぎ捨てて光の武具を身に着けましょう」といい、13節では「主イエス・キリストを身にまといなさい」と、実践的行動への促しを語ります。12節は「洗礼式の用語」。「キリストを着る」は、ガラテヤ(3:27)、コロサイ(3:9-10)、エフェソ(4:24)、にも出てきます。元来はローマの蜜儀宗教での神との神秘的結合を示す用語ですが、その用語を用いて語っています。「馬子にも衣装」という諺があります。イエスの生き方への「模倣」が「毎日」を救うのです。実践訓・方法を身に着けた時、「暗さ」を脱することができるのです。

4、11節には「時」が二つ使われています。初めは「カイロス」(知ってる時、救いの時)。次は「ホーラ」(覚めるべき時、行動の時)。行く先の決まったバスに乗ったのは(カイロス)既に事実です。降りる時に目覚めているようなもの。「日が近づいた」とは降りる時の接近を言っています。「居眠り」に注意して、活かされている者の自覚を、そして各人に与えられて役割を、淡々と生きてゆきたいと思います。